HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世ドイツ文学の研究と教育 ： 『 ニーベルンゲンの歌』をめぐる近年の学術出版状況から
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 121, 1-15
Issue Date	2014-12-26
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.121.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57611
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_121_1-15.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中世ドイツ文学の研究と教育

――『ニーベルンゲンの歌』をめぐる近年の学術出版状況から――

寺　田　龍　男*

【目次】

1. はじめに
2. 研究状況について
2. 1. 研究史概略
2. 2. 近年の状況
3. 近年の出版（公開）状況
3. 1. 校訂版
3. 2. 翻訳
3. 3. 入門書
4.『哀歌』の研究
5. むすびに

【キーワード】 ニーベルンゲンの歌　研究　大学教育　学校教育

1．はじめに

ドイツ語圏では，高等教育（すなわち大学レベル）より前の段階で「中世高地ドイツ語」（Mittelhochdeutsch：以下「中高ドイツ語」と略す）が体系的に教えられたことはない。中高ドイツ語とは，11世紀中頃から14世紀中頃までの，今日的な意味で標準的とされるドイツ語である[1]。この言語で数多くの重要な作品が残され，文学史上ひとつの隆盛をきわめたことから，ドイツやオーストリアなどで「中世文学」といえば，一般にはこの時代の文学が想起される。日本の中等教育で「古文」が対象とする時代区分がはるかに長いのと同様，ドイツ語圏でも教科としての「ドイツ語」における「中世文学」自体は9世紀から16世紀頃までを包摂する。しかしその中心は中高ドイツ語文学なのである。とはいえ最初に述べたように，ドイツなどでは初等教育（4年間）はもちろん，中等教育（8年制のギムナジウムなど）でも，この言語それ自体が教授されることは，特別の企画を除き，まずない。生徒たちはこれを現代語訳で学習するのである[2]。ただし現状認識のためには注釈が必要である。「そもそも中世文学が授業でとり上げられるなら」と[3]。

日本の古文とは異なり，中高ドイツ語（およびその文学）は大学に入って初めて，原文による学習の対象となる。とくに中等教育の「ドイツ語」の教職免許を取得しようとする人々にとり，中高ドイツ語の履修は必須である。彼女ら彼らは，たとえ教育現場で原文を体系的に教え

* 大学院教育学院教授

ることがなくても，生徒たちが読む翻訳の元にある原文を読めなくてはならない。それゆえ，大学で開設される中高ドイツ語の入門授業には多数の学生が集まる。日本とは教育制度が異なるので，もとより単純な比較はできない。しかし教職「人気」にかなりの陰りが見られるにもかかわらず，その授業では（少なくとも開始時に）超満員の光景をしばしば目にする。

大学でドイツ語学文学を専攻する学生のうち，いったいどれだけの人々が教職免許の取得を目指すかは明らかでない。しかしそうした目的の有無にかかわらず，近年学生たちの意識（ないし志向）に変化が起きているように思われる。そしてその変化に応ずるかのように，出版界にもかつては見られなかった傾向が生じている。それはまず「入門書」と「翻訳」の出版が相次いでいることであり，もうひとつは「文学史」の記述の変化である。端的に言えば，需要者の意識は「試験対策」に向きつつあり，それが出版社や著者である研究者（教員）の意識に影響を及ぼしているように思われる。ひとつだけ例を挙げれば，ある入門書の裏表紙には「新たに導入された学士課程の試験に適した（つまり「必携の」）」書，という謳い文句が記されている[4]。この表現が著者ではなく出版社の責任で書かれたものであろうことは想像できる。本文を見ると，重要な語句は太字で印刷され，あらゆるテーマがコンパクトにまとめられている。さらに各章の末尾には「まとめ」があり，本文で詳述された事柄のもっとも重要な点が再度強調されている。購買層の需要に対応した構成であることはまちがいあるまい。

ドイツ語圏では大学だけでなく中等教育のギムナジウムでも，修了のためには筆記と口述の試験が行われる。日本と違って口述試験のウェイトが大きいことは周知の事実だが，学士（ドイツ語でもBachelor）・修士（同Master）課程の導入以来，試験の頻度はさらに高まっている。この制度は古くからあるが，現在の形態は米国など英語圏の制度に依拠している。得られた資格がEUおよび全世界で通用するように，というねらいである。米国と同様，入門書が大量に刊行されるのは当然の成り行きといわれる。要領のよいまとめへの需要が生じるのであろう。その一方でこうした風潮を快く思わない人も少なくない。古くからの伝統が強く残っていた時代では，文学史の記述は格調が高く，読者の心をとらえる（anfassend）ものだった，しかし最近出版されるものは試験対策ばかりだ，とある老研究者は語っていた。だが今日，そうした「格調高い」文学史の多くはすでに絶版となっている。日進月歩で研究が進んでいることを措いても，研究者と初心者が同じ本にかじりつく時代ではなくなりつつある。少なくとも，「便利な」文学史が続々と出版される時代になったことは確かである[5]。

しかし見方を変えれば，数多くの作者や作品についてひとつならず複数の入門書が刊行されること，またたとえ簡略ではあっても異なった視点で書かれた文学史が次々と出版される状況はむしろ喜ぶべきであろう。入門書や文学史だけではない。最近20年の間で明らかに翻訳の刊行が進んでいる。もちろん中高ドイツ語から現代ドイツ語への翻訳である。かつては授業で教材として取り上げられた際にのみ原文で読まれたであろう作品が，続々と対訳形式で翻訳されている。すなわち，見開きの左ページでは中高ドイツ語の原文が，そして右ページには対応する現代語訳が記されたものである。通常，原文は底本とされた写本のテクストをできるだけ忠実に再現するので，研究書としても大きな価値を持つ。ドイツ語圏でも日本と同様，とくに学術に関する出版業界は大きな困難を抱えている。入門書や文学史，さらに校訂版や翻訳を出版するとしても，最大の購買層は大学生であり，これに研究者や図書館が続く。不要になったペーパーバックの翻訳を「Xユーロで売ります」という貼り紙が学生用の掲示板を埋め尽くす状況の下で，100ユーロを超える対訳版が今なお刊行されている現実には，敬意を表したい。

前置きが長くなったが，小稿では日本でもよく知られている『ニーベルンゲンの歌』を基にしてその研究と教育に関連する近年の出版状況を概観し，若干の考察を述べたい[6]。『ニーベルンゲンの歌』の研究は近年，かつてないといってよいほどの活況を呈しているからである。ただ，『ニーベルンゲンの歌』に限らず中世ドイツ文学の研究には，ここで特に強調するまでもなく，さまざまな視点による成果が積み重ねられており，それらのすべてに目配りをすることは筆者には到底できない[7]。まして今後も多様化がますます進むことは確実なので，以下では筆者が知りえた若干の点のみを取り上げる。

2．研究状況について

2．1．研究史概略

研究者の間ではよく知られていることだが，『ニーベルンゲンの歌』は18世紀に重要な写本が再発見され，その校訂版が刊行されて間もないころから（ナポレオン戦争の敗北などによる）ナショナリズムの高揚と深い関係にあった。研究史ではしばしばヒトラー時代における扱いが問題とされるが，フリッツ・ラング監督により『Die Nibelungen』のタイトルで映画化された（1924年）際，作品の冒頭で「ドイツ民族に捧げる」（Dem deutschen Volke zu eigen）という表現が用いられている[8]。この映画は今日でも評価が高いが，ヒトラーが登場するより以前の段階で，すでに民族主義的な土壌が醸成されていたことは明らかである。そのヒトラーの時代に入ると，『ニーベルンゲンの歌』は一挙に政治的な利用を被るようになる。まさにそれゆえに，第二次世界大戦でドイツが敗北したあと，この作品はそれまでとは正反対の扱いを受けることとなった[9]。「純ドイツ的」という表現が正反対のネガティヴな意味で用いられた例が象徴的である[10]。現代のドイツ語圏では，すでに述べたようにギムナジウムの文学（史）の授業で中世文学が講じられることは稀だが，仮に『ニーベルンゲンの歌』が言及されたなら，それはほぼ必ずといってよいほど政治に利用された例としてであろう。その「言及」は作品に描かれる世界やそこに見られる「精神」などではもちろんない。たとえ運命とわかってはいても，死ぬことを辞さず，主君に身を捧げるという「ニーベルンゲン的忠誠心」（nibelungische Treue）が賛美された時代への批判がその典型的な例である。果たして，『ニーベルンゲンの歌』という作品名は聞いたことがあっても，現代の若者の多くはまったく読んでいないという[11]。それは今の日本でも同じだ，と思われるかもしれない。『源氏物語』や『平家物語』の存在は誰でも知っているが，これらを通読した人は読んでいない人よりはるかに少ないだろう。いずれにしてもそれらが第二次世界大戦中に国威発揚の具とされたことはあるだろうか。あったのならどれだけの影響力をもったのだろうか。筆者は寡聞にして答えられない[12]。しかし『ニーベルンゲンの歌』はそのような運命をたどった作品である。「今日の若者に『ニーベルンゲンの歌』のあらすじや主人公を知っているかと問う勇気はない」と発言した研究者もいる[13]。

しかしながら，この作品の研究が途絶えたことはない。フローリアン・クラーグルの浩瀚な書誌は，公刊された論文や研究書の数に関する限り，第二次世界大戦後の数年間こそ少ないものの，その後は質・量ともにドイツ語圏如何を問わず多くの研究者を引きつけていることを明瞭に示している[14]。

2．2．近年の状況

一般の人々の間には「ナチス時代にプロパガンダの材料になった作品」というイメージがあり，これが結果として若者たちの関心の芽を摘んでしまう（あるいはそうなりうる）のに対し，学術研究の世界では『ニーベルンゲンの歌』をめぐる様相が大きく異なる。前世紀末からのわずか20年足らずの間で新たに刊行された校訂版（インターネットで公開されているものを含む），および学術研究に基づく（すなわち一般向けのリライトではない）翻訳，そして研究書や論文は多く，研究史上まれな活況といって差し支えあるまい。大学での講義や演習で取り上げられる機会が増えるのは当然であろう。先にふれた学士課程の導入とは別に，初学者向けの入門書が次々と刊行されるもうひとつの理由はここにあると思われる。

3．近年の出版（公開）状況

3．1．校訂版

たとえどのような目的であっても，およそ文芸作品を研究するのであれば，いかなるテクストに依拠するかを明示することがその第一歩であろう。まして『ニーベルンゲンの歌』のように書記伝承に多様な形態があればなおのこと，写本間の比較は重要な基礎作業となる[15]。『ニーベルンゲンの歌』ではこの方面での研究が近年非常に盛んとなり，多くの写本の校訂版が刊行されている。しかもそれだけでなく，インターネット上での公開も進んでおり，利便性はさらに高まりつつある。この点をまず強調した上で，今日の活況の前がいかなる状態であったかを略述する。

ここではまず次代を少し遡りたい。長い間大きな存在感を持つ版が存在していたからである。それは「バルチュ・デボア」の通称で知られる[16]。『ニーベルンゲンの歌』には断片も含めると40近い写本が今日知られている。それらのうちでもとくに重要な写本A，BおよびCがあるが，この版は今なおもっとも「オリジナルに近い」とみなされることの多い写本Bに基づいている。詳細な脚注があることと相俟って，日本でも中高ドイツ語の授業でしばしばとり上げられ親しまれてきた。筆者も恩恵にあずかった者の一人であるが，研究レベルではすでに以前から，本文の編纂手法が旧式にすぎて今日のレベルにもはや適さないと指摘されており，全面的な改訂ないしはまったく新しい校訂版が必要であるとしばしばいわれてきた。バルチュ・デボアはいわば，写本Bを基にしながらも，現存写本A, B, Cが共通に依拠した「原型」（Archetypus）の再構成を試みた，あるいは少なくともそうしようとした「作品」なのである[17]。こうした作業では編纂者の恣意が作用することが避けられない。またどんなに考証を尽くしても，所詮「復原」されたものは仮想形態でしかない。そのため現在では，中世の文芸作品を校訂する場合，特定の写本を忠実に再現することを旨とし，明らかな誤記などは修正するものの他の写本の表現と入れ替えるようなことは基本的にしないという手法（Leithandschriftenprinzip）が一般的である。そうした考え方が広まるきっかけを作ったのは，他ならぬ『ニーベルンゲンの歌』の上記3写本の間で「優位性」をつけることを否定したヘルムート・ブラッカートの研究である[18]。ブラッカートは主要3写本に「優劣」をつける考え方を批判した上で写本それぞれの独自性を認め，並列するものとしてとらえることを提起した。オリジナルの原態がもはや誰にもわから

ない以上，たとえどんなにそれらしく見えたとしても「近さ」を証明することはたしかにできない。ブラッカートの説には強い説得力があり，その後現在に至る写本研究の礎を築いた功績は高く評価されている。

しかしバルチュ・デボア版の記述の際ふれたように，写本Bがオリジナルに近いと「みなされる」ことが多いのにはそれなりの理由がある。写本AはBの簡略体と考えられ，写本Cには明らかにAとBの記述を変更したと考えるべき箇所が多数存在するからである。ただ問題を複雑にしているのは，写本Cがはたしてほんとうに「新しい」のかどうかを判断しかねる描写が存在することである。そうした問題は，研究者の間ではすでに知られていた。写本Cの校訂版もAのそれも19世紀にすでに刊行されているが，20世紀後半の議論に耐えうるものではなくなっていた。そうした状況にあって，1971年にマイケル・バッツ（1929–2014）は主要3写本の本文を並列する版を刊行した[19]。本書は縦横ともに30センチを越える大型本で持ち運びには不便だが，独創的なアイディアで写本間の比較を容易にし，研究の進捗に大きな貢献をした。（本書への関心は高く，CiNiiによると日本でも28の研究機関が本書を架蔵している。）その後写本Bについてはヘルマン・ライヒャート，ウルズラ・シュルツェ，そしてヨアヒム・ハインツレによる校訂版が刊行された[20]。また写本Cもウルズラ・ヘニヒとウルズラ・シュルツェが編纂した版がそれぞれ出版されて現在に至っている[21]。これらの他にもABC以外の写本がいくつも校訂版として刊行されており[22]，『ニーベルンゲンの歌』の研究は大きく進みつつある。

同時に，写本のデジタル化とオンライン化が進んでいる点も特筆すべきであろう。写本Aについてはすでに19世紀に写真製版が刊行されており，写本BとCも戦後に可視化されたものを手にとることができるようになった[23]。それらはおそらくどの大学の図書館にも架蔵されており，重要な研究手段として用いられてきたであろう。しかし今日では利便性が飛躍的に向上している。ドイツ語圏ではすでに以前から写本を所蔵する図書館や研究機関が協力し，インターネット上で誰でも写本を閲覧できるシステムが構築されている[24]。またこれとは別に，写本全体をCD-ROM化して刊行するプロジェクトも進行中である。その一環として『ニーベルンゲンの歌』（B）をはじめとした作品をすべて含むザンクト・ガレン写本がデジタル化して発売された[25]。むろん実際に手にとって見る場合と異なるのは筆者も経験で承知しているが，写本を閲覧することにより，校訂版の字面だけでは見えない知識や刺激を得ることができる。

しかし何より注目すべき成果として，ウィーン大学を中心とする研究者（とくにヘルマン・ライヒャートとヴァルター・コーフラー）のプロジェクトを挙げたい。まず『ニーベルンゲンの歌』の10写本（それぞれほぼ完本）が校訂版としてインターネット上で公開された[26]。さらにそれらがひとつのページに収められて比較を可能にしたページも作成され，誰でも閲覧できるようになった[27]。個々の写本については，原文に可能な限り忠実に文字起こしをしたページとそれに若干手を加えて読みやすくした版の両方を見ることができる。すでに挙げた先行する校訂版（書籍版）と比べれば，使いやすさでは一歩譲るだろう。しかし注意して見るとわかるが，これらのサイトは頻繁に更新されている。通常の，いわゆる刊行本として出版された校訂版ではそうした「サービス」はほとんど期待できない。またこのプロジェクトは，従来注目度の低かった写本のテクストをも公開している。すべて無償で誰もが閲覧できる。『ニーベルンゲンの歌』を研究するための基盤を全世界に公開し，いわばグローバル化を促進した功績は賞賛に値し，また感謝したい。（ここで用いられた方法は，他の多くの国や地域，文化圏の様々なジャンルの文学研究にも参考になるのではないだろうか。）

なお最後に，写本Aの校訂版と翻訳の刊行が望まれることを付言したい。写本BやCと比べて，明らかに研究が遅れているからである。

３．２．翻訳

『ニーベルンゲンの歌』の翻訳として，一世代前までもっとも広く用いられたのはヘルムート・ブラッカートによるもの（1970/71年[28]）であろう。基本的には写本Bに依拠し，独自の校訂によるものの，バルチュ・デボアの版と同じく写本Bには存在しない3詩節を追加し，2379詩節の構成で中高ドイツ語の本文とその翻訳を左右に並べる。ただすでに述べたように，ブラッカートは写本Bの優位性を信じていたのではないことを確認しておきたい。かつては写本Aが作品の「オリジナル」にもっとも近いと考えられ，19世紀にはそれが通説となっていた。1900年にヴィルヘルム・ブラウネが写本Bの方が原典により近いとする見解を表明し[29]，先行するラッハマン説を覆すと，今度はブラウネの論が定説化した。ブラッカートはこのブラウネ説を批判し，3大写本A, B, Cの間に優劣の差をつけることはできないと主張したのである。しかし写本Bが長きにわたっていわば権威ある存在とみなされてきたためであろう，ブラウネ説は現在もなお通説の地位を失っていないかに見える。1997年，ズィークフリート・グロッセがバルチュ・デボアの校訂版に基づく翻訳を刊行したが，この翻訳も当然ながら写本Bに拠っている。このグロッセの翻訳は2003年の部分的改訂を経た後，2010年にウルズラ・シュルツェによる新たな校訂版（同じく写本B）への翻訳の形で継承出版された[30]。ブラッカートとグロッセ（2003年）の翻訳についてはヴェルナー・ホフマンのきわめて詳細な対照研究があるので関心がある方にはそちらを参照していただきたい[31]。重要なのは，ここでとり上げないものも含めて1990年代から『ニーベルンゲンの歌』の翻訳が次々と刊行されている事実である。2005年には写本Cの翻訳（および校訂版）がウルズラ・シュルツェによって刊行されている[32]。そして2013年には，刊行の予告からほぼ20年を経てヨアヒム・ハインツレの翻訳（および校訂版）が出版された[33]。

これらの翻訳について，筆者にはことさらいうまでもなく論ずる能力がない。ドイツ語圏を中心とする研究者の書評では様々な論が展開されているが，後出しジャンケンで勝った（?）者の尻馬に乗るような態度と行為は厳に慎まなければならない。ここでは，筆者にとり興味深い点を紹介したい。それは「戦士」を表す語彙が現代語にどう翻訳されているかである。中高ドイツ語ではこの語野に属するものとしてdegen, helt, recke, wîgantがある。これらに「騎士」を表すritterを加えた5種類の語の訳し方は多くの研究者を悩ませてきた。これらの語はすべて現代語にも残っており，辞書に記載がある。だがHeld（日本語では通常「勇士」や「英雄」と訳される）はそのまま用いることが可能であるのに対し，他のDegen, Recke, Weigandは日常生活での使用頻度が低く，したがって読者に作品成立当時と同じ（ないしはそれに近い）感覚を期待することができない。これらはどう訳されているだろうか。端的にいうと，ブラッカートとグロッセはheltをおおむねHeldとして残しているものの，写本Bでもっとも頻繁に用いられるreckeの場合，ブラッカートがほぼそのままReckeと訳しているのに対し，グロッセはこの語を一貫して避けている。また現代語ではDegenの認知度がさらに低く，ブラッカートもグロッセもこの語をほとんど用いていない[34]。4語彙の中でもっとも古態とされるwîgant（Weigand）（写本Bでは2例のみ）は，両者とも別の語に置き換えている。これに対してハインツレは，「戦士」を表す4語の訳をそのまま現代の語形に置き換えるのはふさわしくないと判断し，すべて

Heldに統一した[35]。

異なる文化を背景に持つ研究者にとり，バルチュ・デボア以来のさまざまな校訂版に施されたものも含めて，それぞれの訳者による詳細な註がたいへん有益であることはあらためて強調するまでもなかろう。ドイツ語の母語話者と語感を共有しない者としては，訳者それぞれの個性と熟慮の結果による判断を尊重しなければならない。なお『ニーベルンゲンの歌』ではないが，同じく英雄叙事詩のジャンルに属する『オ（ル）トニート』·『ヴォルフディートリヒ』の校訂・翻訳が2013年に刊行された。ここでも「戦士」のうち3種の語彙，すなわちdegen, helt, reckeとritterが数多く用いられているが，訳者は（degen → Degenとrecke → Reckeを含め）ほとんどすべての用例を現代語の対応形に移している[36]。この訳し方がどう評価されるかはさておき，ブラッカートからハインツレらに至る傾向とは逆に古態を復活させようとする意図は明らかであり，今後どう展開するかが注目される。

3. 3. 入門書

ここまで校訂版と翻訳に関する近年の状況を簡略に俯瞰した。入門書の記述の仕方は様々だが，中世文学であれば『ニーベルンゲンの歌』に限らず作品の成立（と作者），構造，他の作品やジャンルとの関連，受容史などが目次に並ぶ。著者はみな最新の研究成果に依拠しつつ，読者にわかりやすいようコンパクトにまとめる工夫を凝らしている。かつてはメッツラー叢書（Sammlung Metzler）に代表されるシリーズがあり，ほとんどの学生が『ニーベルンゲンの歌』など重要な作品をこのシリーズの入門書で学んでいた[37]。『ニーベルンゲンの歌』をはじめとするこれらの入門書を今，手許のいくつかの新しいものと比べると隔世の感がある。ひと言でいえば，かつては薄い本ながら小さな活字がページを埋め尽くしていたのに対し，今日ではしばしばページの端に欄外記載の形でキーワードが書かれている，あるいは本文中に太字で強調されるなど，一目で要点を看取できる（はず）という違いがある。小稿の最初ですでに述べたので繰り返しになるが，近年の入門書は読者がそれぞれの関心に応じてどこから読んでも理解でき，また必要な情報が得られる，という構成になっている。学士課程の導入により一挙に増えたとされる各種試験でどこまで細かく問われるかはもとより筆者にはわからない。旧世代に属する者としては，深みのある解説がぎっしりと詰め込まれた方に親しみを感じはする。しかしこれは時代の要請なのであろう。言語も文化も異なる者にとっては却って喜ぶべきことかもしれない。たとえ記述は表面的に見えたとしても，その背後には筆者など到底およびのつかない学識が蓄積されている。最新の研究状況を簡便に紹介してくれる刊行物はありがたい。

ここでヘルマン・ライヒャート（ウィーン大）の研究を紹介しておきたい。ライヒャートはすでに挙げた校訂版の他，これに基づくコンコーダンス（単なる用語索引ではない）や注釈書を刊行しただけでなく，自身のホームページ上でその注釈書を公開し，これを頻繁に更新している。また校訂版の訂正文も公開している[38]。ライヒャートの貢献はきわめて大きく，今後の研究を大きく促進するものといえる。

4.『哀歌』の研究

『ニーベルンゲンの歌』を研究するのであれば,『哀歌』を避けて通ることはできない。『哀歌』は,現時点で知られている残存資料を見る限り,『ニーベルンゲンの歌』の多くの(ほぼ完全ないし脱落の少ない)写本に連続する形で書き継がれ,一種の「コメント」として機能した作品である。この『哀歌』に注目が集まったことは,戦後では少なくとも二度ある。その最初はミヒャエル・クルシュマンが「『哀歌』先行説」を提起して以降の時期,そして次がヨアヒム・ブムケによる研究から今日に至る期間である。

クルシュマンは1979年に発表した論文で,『哀歌』は(断片を除く)写本では常に『ニーベルンゲンの歌』に続く形で書かれているものの,実際の成立年代は『ニーベルンゲンの歌』よりも古いという仮説を発表した[39]。クルシュマンは,徹頭徹尾文字文芸である『哀歌』の成立が契機となり,ある一人の人物がさまざまな口頭伝承を巧みに織り合わせて文字文芸化したと考えた。そして両作品の成立順について,19世紀には多く見られた『哀歌』先行説に再び光を当て,最近ではほとんど誰も疑わなくなっていた通説に疑義を投げかけたのである。これに対してブルクハルト・ヴァッヒンガーは,1981年に公刊した論文で従来の説を支持する意見を述べた[40]。しかしヴァッヒンガー自身が留保しているように,彼が従来の見方を支持するのは今後の議論を期待するためで,いわば建設的な批判というべきであり,クルシュマンの論文がまだ草稿の段階から友人として論じあった見方を一方的に否定するものではない。筆者は寡聞にして,その後正面からこの問題について論じた研究を知らない。幾人かの研究者と面談した際は,従来の『ニーベルンゲンの歌』が先行するという見方の人が多かった。実際クルシュマンも,その後1987年に発表した「『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』」で自説を強く主張しているわけではない[41]。しかしかつては『哀歌』が先行すると考える研究者が多かったことから始めて,年代の特定はなお解決されていないことを示唆している[42]。議論は今日収束したかに見える(ないし膠着状態にある)が,なお継続する意義はあると思われる。

一方ブムケ(1929–2011)は,オリジナルはひとつという従来の通念を見直すことから始め,複数のマヌスクリプトが同時並行的に作成されていたという仮説を提示した。そして4系統の代表的写本を並べて示す校訂版を刊行したのである[43]。先行研究を網羅的に俯瞰して現存写本を精査する,実証的研究の極みというべき成果である。一時はドイツ語圏の多くの大学でブムケの仮説を検討する演習やコロキウムが展開されていた。今後の展開について予想を立てることは筆者の能力を超えるが,テクストクリティーク(本文批判)の原理を根本的に見直すことを提起した重要なテーゼであることはまちがいない[44]。『哀歌』の記述が『ニーベルンゲンの歌』の写本伝承に影響を与えたという仮説はすでにあるが,今後この「オリジナル複数説」を『ニーベルンゲンの歌』の成立史とも関連付けて研究を進めることを期待したい。

なお,『哀歌』(写本B)についても複数の翻訳がある。書評に見る評価は様々だが,いずれも詳しく有益な註が施されていることを付け加えておく[45]。

5．むすびに

日本における中世ドイツ文学の研究は『ニーベルンゲンの歌』で始まったといってよいほど翻訳も研究も長い歴史と蓄積がある[46]。今後の展開を予想することは筆者には困難であるが，いくつかの点を指摘しておきたい。

異なる文化圏における現象を研究すると，どうしてもその文化圏の人々の言説が頼りになる。西洋文学を対象とする場合はとくにその傾向が強まるのではないだろうか。少なくともドイツ文学の研究に関しては，ドイツ語圏で提起された新しい理論が（批判的検討とともに）紹介される例がしばしば見られる。研究者が一人で目配りできる範囲は限られているので，そうした成果によって啓発されることは多々ある。しかし日本におけるドイツ文学の研究者は，周知のように減少傾向が続いている。「数」が少なくなることが，必ずしも「衰退」を意味するわけではない。しかし現在の人文社会科学をとりまく状況の中では，個々の研究者が自分の研究の意義を社会に対して説明することへの要請がますます強くなることが予想される。競争的研究資金の助成を受けようとする場合はもちろん，今後はいわゆる「校費」を得る場合でもそうなることが懸念される。プロジェクト型研究への要請が強まる傾向の背景にも同じ考え方がある。

ドイツ文学の研究者は，ドイツ語圏を中心とする西洋社会だけでなく全世界に多数存在する。今のところ，その存立基盤が揺らぐようには見えない。海外の研究者に向けて成果を発信するなら，手段はドイツ語であると筆者は今も思っている。しかし研究成果が英語で発表される傾向は，中世文学の場合でも強まりつつある。一方日本文学研究の場合，海外，とくに西洋ではその成果が英語で発表されるのが通例である。ヨーロッパを見ると，一国単位では日本を対象とする研究者があまりにも少ない。まして文学から社会学，政治学などと領域を絞ると，国境をまたがなければ研究自体が立ち行かないように見受けられる。日本および日本社会や文化に関する研究でインパクト・ファクターの高いジャーナルがみな英文誌であるなら，彼女ら彼らが英語で発表するのは半ば必然である。

中世ドイツ文学の研究成果を日本の国内誌において英語で発表するよう求められることは，当分はないであろう。けれども，納税者の理解が得られないという理由で次々とポストの削減や配置転換が断行された国はすでにある。今後の成り行きを見守りたい。

【付記】
小稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）・課題番号23520358）の助成を受けて行う研究の成果の一部である。

注

1 より正確には，ドイツ語圏中南部の諸方言を包括する上位概念である。荻野蔵平・齋藤治之（編著）『ドイツ語史小辞典』東京：同学社2005年，116頁を参照。

2 日本の学校教育なら「漢文」に相当するであろう「ラテン語」をギムナジウムで履修した場合は，原文をかな

り徹底して学ぶことになる。

3 例としてヘッセン州が定めたギムナジウムにおけるドイツ語指導要領（2010/11年）を見ると，「英雄」としてズィークフリートの名は挙がっているものの作品の指摘はない（S. 52）。また「中世から現代までの恋愛抒情詩（Liebeslyrik）」という表記もあるが（S. 60），そこで推薦された作品の中でもっとも古いものはA. ケラーの『村のロメオとユリア』（1856年）である。Vgl. Lehrplan Deutsch. Gymnasialer Bildungsgang. Jahrgangsstufen 5 bis 13. Hessisches Kultusministerium [2010/11]. URL: http://verwaltung.hessen.de/irj/HKM_Internet?cid=9e0b5517dfc688683c15ce252202d4b9（2014年9月25日確認）

4 Johannes Spicker: Oswald von Wolkenstein. Die Lieder. Berlin: Schmidt 2007（Klassiker-Lektüren 10）.

5 もちろん，純粋に学術を志向する文学史の刊行が途切れたわけではない。教授職の公募文書などを見れば明らかだが，中世ドイツ文学の講座主任には，中世文学のあるゆるジャンルについて講義と演習を行う識見があることが求められている。したがって，新たに誕生した教授がしばしば文学史を刊行するのも事実である。どの研究者もそれぞれ独自性を出そうとするので，読者が様々な刺激が得られることは強調しておきたい。

6 筆者は中世ドイツの文芸作品を，異なる文化を背景に持つ者として研究している。その際大きな拠り所となるのが日本文学，とりわけ軍記物語の研究によってもたらされた成果である。『ニーベルンゲンの歌』をはじめとする英雄叙事詩の主要な作品と『平家物語』『保元物語』『平治物語』『承久記』のような軍記物語は，成立年代が13世紀前半を中心とする時期に重点がある。またどちらの作品群も口承文化と文字文化の接点で成立している。比較が可能な点は他にもある。しかしことさらにいうまでもなく，両者の背景社会は大きく異なる。また相互の影響関係も認められない。比較や対比の難しさはまさにここにあるのだが，ともに口承文化と文字文化の性質を有し，なおかつ両方の文化が作品の内外で相互に影響を与え合いながら伝承され続けた。さらにどちらにおいてもさまざまな「異本」が広まっている。これらを考慮すると，たとえ牛歩の歩みではあっても，「いくさ物語」の研究状況の一端を東西に伝えることには意味があると考える。

7 『ニーベルンゲンの歌』に関する数多くの課題のうちでも，成立事情に関しては研究史で常に論じられてきた。山本潤（「『記憶』の継承―『ニーベルンゲンの歌』と口承文芸―」明治学院大学言語文化研究所『言語文化』27（2010年）56–71頁）が現在の定説を広い視野から詳細に報告している。

8 以下の映像を参照：https://www.youtube.com/watch?v=yNa74OevW_c（2014年9月25日確認）

9 この分野の研究は今なお盛んに行われている。Otfrid Ehrismann: Nibelungenlied. Epoche – Werk – Wirkung. 2. Aufl. München: Beck 2002, S. 166–200; Werner Wunderlich: Nibelungenpädagogik. In: Joachim Heinzle, Klaus Klein und Ute Obhof（Hrsg.）: Die Nibelungen. Sage – Epos – Mythos. Wiesbaden: Reichert 2003, S. 345–373などはそれら優れた研究のごく一部である。先の大戦中のさまざまな状況を批判的に分析する姿勢は，ドイツ語圏における中世文学研究の大きな特徴のひとつといえる。

10 C[ecil] M[aurice] Bowra: Heroic Poetry. London: Macmillan 1952, p. 548: “Even in the *Nibelungenlied*, which has a truly German taste for wholesam slaughter,（…）”

11 この点に関して筆者が収集した情報は断片的であり十分とはいえず，現段階での大雑把な見通しである。ご教示をいただいたドイツ語圏の多くの学校関係者には，一人ひとりのお名前を挙げることができないもののこの場でお礼を申し上げたい。

12 大津雄一「文学としての規定と評価」（大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子（編）『平家物語大事典』東京：東京書籍2010年799–806頁），803–804頁を参照。

13 Hans Fromm: Das Nibelungenlied und seine literarische Umwelt. In: Klaus Zatloukal（Hrsg.）: Pöchlarner Heldenliedgespräch. Das Nibelungenlied und der mittlere Donauraum. Wien: Fassbaender 1990（Philologica

Germanica 12). S. 3–19, hier S. 3.

14 Nibelungenlied und Nibelungenklage. Kommentierte Bibliographie 1945–2010. Hrsg. von Florian Kragl, bearb. von Elisabeth Martschini, Katharina Büsel und Alexander Hödlmoser. Berlin: Akademie Verlag 2012. 本書は1945年から2010年の間に刊行された研究書や論文を年次別に網羅的に収集し，コメントによって内容の紹介を行っている。禁欲的といえるほど評価を避けている他，著者別・作品別・キーワードごとの索引が施されており，今後の研究に大きく貢献することが期待される成果である。なお以下は筆者の推測による蛇足だが，1976年にハインツ・ルップが刊行した論文集（Heinz Rupp（Hrsg.): Nibelungenlied und Kudrun. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1976（Wege der Forschung 54））では非ドイツ語圏出身の研究者による考察が数多く収められている。ほぼ同時期に同じシリーズで刊行されたハルトマン・フォン・アウエに関する論文集（Hugo Kuhn / Christoph Cormeau（Hrsg.): Hartmann von Aue. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1973（Wege der Forschung 359））の構成とはこの点で異なる。これは当時の中世文学，とりわけ『ニーベルンゲンの歌』を初めとする英雄叙事詩の研究が戦前の桎梏から抜けきれていなかったこと，そして編者ルップがそのことを強く意識していたことを表すといえよう。

15 軍記物語の研究者大橋直義も「軍記物語とその周縁に位置する書物を研究するにあたって，<諸本>を検証することを避けて通ることはできない。いや，むしろ，軍記物語についてだけではなく，文学研究（あるいは人文科学諸分野）の全領域にわたって，最も基礎的かつ，それゆえに最重要の方法であるとしてもよいかもしれない」（大橋直義「シンポジウム<諸本>研究の可能性」（『軍記と語り物』50号2014年1–2頁）1頁）と述べている。

16 Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch hrsg. von Helmut de Boor. 22., revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Aufl., Nachdruck. Wiesbaden: Albert 1996. 本書の初版は1869年にBrockhaus社から刊行された。1996年の版は1988年に同社から刊行された第22版をAlbert社がリプリントしたもので，これを最後に本書は絶版となっている。

17 ここにいう「原型」は，原作者の手になる「オリジナル」（Original）を意味するのではない。それは復元不可能だが，有力3写本の原型ならば可能であろうと，当時は考えられていた。なおこのABCという呼称は，19世紀に古典文献学の基礎を築いたカール・ラッハマン（Karl Lachmann: 1793–1851）が，主要3写本をこの順で「オリジナル」に近い（すなわち写本Aがもっとも近い）と考えたことに由来する。Vgl. Karl Lachmann: Vorrede. In: Der Nibelunge Noth und die Klage. Nach der ältesten Überlieferung mit Bezeichnung des Unechten und mit den Abweichungen der gemeinen Lesart hrsg. von K. L. 6. Ausgabe Berlin: de Gruyter 1960（初版1826年）. S. V–XII, hier S. IX.

18 Helmut Brackert: Beiträge zur Handschriftenkritik des Nibelungenliedes. Berlin: de Gruyter 1963（Quellen und Forschungen zur Sprach- und Kulturgeschichte der germanischen Völker N. F. 11）.

19 Das Nibelungenlied. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften. Hrsg. von Michael [Stanley] Batts. Tübingen: Niemeyer 1971.

20 Das Nibelungenlied. Nach der St. Galler Handschrift hrsg. und erläutert von Hermann Reichert. Berlin/New York: de Gruyter 2005; Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Nach der Handschrift B hrsg. von Ursula Schulze. Ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart: Reclam 2010; Das Nibelungenlied und die Klage. Nach der Handschrift 857 der Stiftsbibliothek St. Gallen. Mittelhochdeutscher Text, Übersetzung und Kommentar. Hrsg. von Joachim Heinzle. Berlin: Deutscher Klassiker Verlag 2013（Bibliothek deutscher Klassiker 12）.

21 Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. Hrsg. von Ursula Hennig. Tübingen: Niemeyer 1977

（Altdeutsche Textbibliothek 83）; Das Nibelungenlied. Nach der Handschrift C der Badischen Landesbibliothek Karlsruhe. Mittelhochdeutsch und Neuhochdeutsch. Hrsg. und übersetzt von Ursula Schulze. Düsseldorf/Zürich: Patmos 2005.

22 Vgl. Eine spätmittelalterliche Fassung des Nibelungenliedes. Die Handschrift 4257 der Hessischen Landes- und Hochschulbibliothek Darmstadt. Hrsg. und eingeleitet von Peter Göhler. Wien: Fassbaender 1999（Philologica Germanica 21）; Das Nibelungenlied nach der Handschrift n. Hs. 4257 der Hessischen Landes- und Hochschulbibliothek Darmstadt. Hrsg. von Jürgen Vorderstemann. Tübingen: Niemeyer 2000（Altdeutsche Textbibliothek 114）; Margarete Springeth: Die *Nibelungenlied*-Bearbeitung der Wiener Piaristenhandschrift（Lienhart Scheubels Heldenbuch: Hs k）. Transkription und Untersuchungen. Göppingen: Kümmerle 2007（Göppinger Arbeiten zur Germanistik 660）; Nibelungenlied und Klage. Redaktion I. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart: Hirzel 2011; Nibelungenlied. Redaktion D. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart: Hirzel 2012. ほぼ同時にインターネット上で公開されたものもあるが，書籍として手にとることができるのはたいへんありがたい。

23 Das Nibelungenlied nach der Hohenems-Münchener Handschrift（A）in phototypischer Nachbildung. Nebst Proben der Handschriften B und C. Mit einer Einleitung von Ludwig Laistner. München: Verlagsanstalt für Kunst und Wissenschaft 1886; Das Nibelungenlied und die Klage. Handschrift B（Cod. Sangall. 857）. Köln/Graz: Böhlau 1962; Der Nibelunge Liet und die Klage. Die Donaueschinger Handschrift 63 [Laßberg 174]. Mit einem forschungsgeschichtlichen Beitrag zu ihrer Bedeutung für Überlieferung und Textgeschichte des Epos hrsg. von Werner Schröder. Köln/Wien: Böhlau 1969.

24 http://www.handschriftencensus.de（2014年9月25日確認。）個人蔵などでまだ公開されていないものも多数あるが，きわめて多くの写本が公開されている意義は大きい。

25 Sankt Galler Nibelungenhandschrift（Cod. Sang. 857）. Digitalfaksimile CD-ROM für Windows und Macintosh. Hrsg. von Stiftsbibliothek St. Gallen / Parzival-Projekt（Basel und Göttingen）. St. Gallen: Stiftsbibliothek St. Gallen 2005.

26 https://germanistik.univie.ac.at/links-texts/textkorpora（2014年9月25日確認。）

27 https://germanistik.univie.ac.at/fileadmin/user_upload/inst_germanistik/Textarchiv/Texte_und_Medien/wrkst_synopse.pdf（2014年9月25日確認。）全体で2605ページにおよぶ。

28 Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Hrsg., übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert. Frankfurt a. M.: Fischer 1970（Teil 1）, 1971（Teil 2）（Bücher des Wissens 6038/6039）.

29 Wilhelm Braune: Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur. Bd. 25（1900）, S. 1–222.

30 Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart: Reclam 1997（Universal-Bibliothek 644）.（参考文献と解説を改めた版が2003年に刊行されている）; Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Nach der Handschrift B hrsg. von Ursula Schulze（註20）.

31 Werner Hoffmann: Ein mediävistischer Bestseller und sein Konkurrent. Zu den Übersetzungen des ‘Nibelungenliedes’ durch Helmut Brackert und Siegfried Grosse. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur. Bd. 133（2004）, S. 293–328.

32 Das Nibelungenlied. Hrsg. von Ursula Schulze（註21）.

33 Das Nibelungenlied und die Klage. Hrsg. von Joachim Heinzle（註20）. この校訂および翻訳は後述する『哀歌』も掲載している。

34 Werner Hoffmann: Ein mediävistischer Bestseller und sein Konkurrent（註31）, S. 310f.

35 Das Nibelungenlied und die Klage. Hrsg. von Joachim Heinzle（註20）, S. 1034f.

36 Otnit Wolf Dietrich. Frühneuhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Hrsg. und übersetzt von Stephan Fuchs-Jolie, Victor Millet und Dietmar Peschel. Stuttgart: Reclam 2013（Reclams Universal-Bibliothek 19139）. ここで「オトニート」(Otnit) と呼ばれる英雄は他写本ではほぼ「オルトニート」(Ortnit) と表記されている。『オルトニート』と『ヴォルフディートリヒ』は異なる作品だが前者が後者の前史をなしていることから，同一写本で続けて書かれている例が多い。

37 同叢書の『ニーベルンゲンの歌』はヴェルナー・ホフマンが執筆している。Werner Hoffmann: Das Nibelungenlied. 6., überarbeitete und erweiterte Auflage des Bandes Nibelungenlied von Gottfried Weber und Werner Hoffmann. Stuttgart: Metzler 1992（Sammlung Metzler 7）. その他の入門書をいくつか挙げておく。Joachim Heinzle: Das Nibelungenlied. Eine Einführung. Frankfurt/Main: Fischer 1994; Ursula Schulze: Das Nibelungenlied. Stuttgart: Reclam 1997（Reclam Universal-Bibliothek 17604）; Otfrid Ehrismann: Nibelungenlied（註9）; ders.: Das Nibelungenlied. München: Beck 2005; Jan-Dirk Müller: Das Nibelungenlied. 3., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Berlin: Schmidt 2009（Klassiker-Lektüren 5）; Nine R. Miedema: Einführung in das „Nibelungenlied". Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2011. なおここで立ち入ることはできないが，上記以外にも入門書はあり，また複数の作品の入門・解説を収録した書籍やドイツ語以外の言語によるものも含めるとおびただしい数にのぼる。それはとりもなおさず，ドイツ語圏以外でもこの作品への注目度が高いことを意味する。

38 Das Nibelungenlied. Hrsg. von Hermann Reichert（註20）.（本書は校訂版であるが，キーワードを太字にするなどの工夫が施された「入門」も掲載されている）; Hermann Reichert: Konkordanz zum Nibelungenlied. 2 Bde. Wien: Fassbaender 2006（Philologica Germanica 27/1–2）; ders.: Das Nibelungenlied-Lehrwerk. Sprachlicher Kommentar, mittelhochdeutsche Grammatik, Wörterbuch. Passend zum Text der St. Galler Fassung（„B"）. Wien: Praesens 2007. ホームページURL: http://homepage.univie.ac.at/hermann.reichert（2014年9月25日確認）

39 Michael Curschmann: ›Nibelungenlied‹ und ›Nibelungenklage‹. Über Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Prozeß der Episierung. In: Christoph Cormeau（Hrsg.）: Deutsche Literatur im Mittelalter ―Kontakte und Perspektiven. Hugo Kuhn zum Gedenken. Stuttgart: Metzler 1979. S. 85–119, hier S. 86ff.

40 Burghart Wachinger: Die ‚Klage' und das Nibelungenlied. In: Achim Masser（Hrsg.）: Hohenemser Studien zum Nibelungenlied. Dornbirn: Vorarlsberger Verlagsanstalt 1981（»Monfort« Vierteljahresschrift für Geschichte und Gegenwart Vorarlsbergs Heft 3/4 1980）, S. 264–275.

41 'Nibelungenlied' und 'Klage'. In: Kurt Ruh（Hrsg.）: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Bd. 6. 2., völlig neu bearbeitete Auflage. Berlin/New York: de Gruyter 1987. Sp. 926–969, hier Sp. 932f.

42 筆者は，クルシュマン氏が1985/86年冬学期にミュンヘン大学で「Nibelungenlied und Klage」(ニーベルンゲンの歌と哀歌) と題して開講した講義を聴く機会に恵まれた。当時同氏はVerfasserlexikonに掲載する解説（前註）を執筆中で，講義では自らの『哀歌』先行説や，ハンス・フロムが再度注目した「『ニーベルンゲンの歌』の原典には写本BよりもAの方が近い」という見解を精力的に展開・紹介していた。同氏からは筆者の数々の愚問に対しても懇切丁寧なご教示をいただいてきた。クルシュマン氏にはこの場を借りてあらためて

お礼を申し上げたい。

43 Joachim Bumke: Die vier Fassungen der ›Nibelungenklage‹. Untersuchungen zur Überlieferungsgeschichte und Textkritik der höfischen Epik im 13. Jahrhundert. Berlin/New York: de Gruyter 1996（Quellen und Forschungen zur Literatur- und Kulturgeschichte 8）; Die ›Nibelungenklage‹. Synoptische Ausgabe aller vier Fassungen. Hrsg. von Joachim Bumke. Berlin/New York: de Gruyter 1999.

44 同氏が逝去される前にいただいた私信には,『哀歌』の研究を続けていると記されていた。あとに続く研究者の成果に期待したい。

45 Diu Klage. Mittelhochdeutsch —Neuhochdeutsch. Einleitung, Übersetzung, Kommentar und Anmerkungen von Albrecht Classen. Göppingen: Kümmerle 1997（Göppinger Arbeiten zur Germanistik 647）; Die Nibelungenklage. Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Karl Bartsch. Einführung, neuhochdeutsche Übersetzung und Kommentar von Elisabeth Lienert. Paderborn: Schöningh 2000（Schöninghs mediävistische Editionen 5）; Das Nibelungenlied und die Klage. Hrsg. von Joachim Heinzle（註20）.

46 中島悠爾「日本における中世文学研究文献（I）」日本独文学会『ドイツ文学』63（1979年）121–135頁），134頁参照。現在も一般市場で入手可能な翻訳としては，写本Bに基づく相良守峯（訳）『ニーベルンゲンの歌』（前編・後編）（初版1955年の改訳）東京：岩波書店1975年（岩波文庫　赤32-401-1/2），同じく写本Cによる石川栄作（訳）『ニーベルンゲンの歌』（前編・後編）東京：筑摩書房2011年（ちくま文庫 に-10-1/2）がある。なお岡崎忠弘（訳）『ニーベルンゲンの歌』（前編1–1142）広島：渓水社1989年の後編の刊行が待たれる。また先行する研究論文には数多くの貴重な成果が示されているが，小稿の性質上ここでは上記一篇を除き割愛させていただいた。

Research and Education in Medieval German Literature: Taking the Boom in Academic Publications about the *Nibelungenlied* as an Example

Tatsuo TERADA

Key Words

Nibelungenlied Research Education

Abstract

In contrast to Japan where classic Japanese language and literature are taught in high school, high school students in the German-speaking countries generally do not study Middle High German language and literature. They associate the *Nibelungenlied*, which used to be compulsory reading in school, with negative connotations such as 'Nibelungische Treue (loyalty)'. But this epic seems to become more and more 'popular' in academic research and higher education. In the last two decades, many editions, translations and introductions of the *Nibelungenlied* have been published. The introduction of bachelor and master courses has moreover led to a rapid increase of various texts, for which the demand of students for introductions, including the *Nibelungenlied*, must be met.

This paper analyses the background of this boom especially with regards to successful online publications and proposes to apply the methods of scholars to other genres of medieval literature.